

## 2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

|       |                                    |
|-------|------------------------------------|
| 研究課題  | 少年少女雑誌におけるスポーツ小説から見る<br>ジェンダー規範の考察 |
| キーワード | ①スポーツ小説、②運動小説、③少年少女雑誌              |

### 研究者の所属・氏名等

|            |   |     |             |
|------------|---|-----|-------------|
| フリガナ<br>氏名 | ヤマダ アキコ<br>山田 昭子  | 所属等 | 専修大学 文学部 助教 |
| プロフィール     | 専修大学文学研究科博士後期課程終了。博士（文学）。日本近現代文学専攻。主な研究テーマは吉屋信子、少女小説、近現代女性作家。近年の論文に「文字の美しさと少女の美—少女雑誌に見る文字指導の変遷—」（「ことばと文字」12号 令和元年12月）、「若草」と宇野千代の仕事」（「芸術至上主義文芸」第45号 令和元年10月） |     |             |

### 1. 研究の概要

本研究ではスポーツをテーマにした創作作品及び周辺記事を調査対象としている。そして同一雑誌内だけではなく、異なる出版社間における差異、対象読者性別の差異を考慮することで見えてくるそれぞれの身体表象、ジェンダー規範を考察していくものである。スポーツをテーマにした創作作品に着目することは、一つの表象として作品に取り込まれたスポーツ、そしてその背後に込めようとしたメッセージを読み取ることを可能にすると考えられるからである。

本研究とテーマを同じくする先行研究として、高橋一郎「第三章 女性の身体イメージの近代化：大正期のブルマー普及」（高橋一郎・萩原美代子・谷口雅子・掛水通子・角田聡美『ブルマーの社会史 女子体育へのまなざし』青弓社 2005年）、拙論「「少女倶楽部」における運動小説について」（「芸術至上主義文芸」2007年）、笹尾佳代「変奏される<身体>—女子スポーツへのまなざし」（疋田雅昭・日高佳紀・日比嘉高編著『スポーツする文学 1920-30年代の文化詩学』青弓社 2009年）、小石原美保「1920-30年代の少女向け雑誌における「スポーツ少女」の表象とジェンダー規範」（「スポーツとジェンダー研究」2014年）などがある。

高橋論、笹尾論、拙論はいずれも時代や雑誌を限定して考察を行っており、それらを捕捉する形で小石原がこれまで対象外となっていた時代と作品、言説ジャンル、視覚的イメージに着目することで「スポーツ少女」の表象形成やそのジェンダー規範について考察している。だが、雑誌間に見られる差異、特に少年少女雑誌間で見られる差異に着目して考察するものは管見の限り見当たらない。この事実は、これまで見逃されがちであったが、「スポーツと文学」の関係性を考察するものは年々増えており、2021年のオリンピック開催で再び人々がスポーツに興味を抱き始める今だからこそ、取り組むにふさわしい課題でもあるといえるだろう。

### 2. 研究の動機、目的

自身の専門分野である少女小説の研究を進めていく中で、少女雑誌が最も隆盛を迎える大正時代に、「運動小説」という一群の小説があることを知った。

運動小説は他のジャンルの少女小説とは異なり少女の身体と心の動きを連動させつつ展開する点に大きな特徴がある。つまり少女(少年)の身体表象、ならびにストーリー展開から伺えるジェンダー規範についても読み取りやすいということだ。これまで自身の研究では「少女倶楽部」に限定し調査を行ってきたが、上記の点をより精査に調査するには他の少女雑誌との比較検討、ひいては男女差からくるジェンダー差に関する考察への強い必要性が高まり、本研究の動機付けとなった。

### 3. 研究の結果

本研究の最大の特徴として、同一出版社による男女の雑誌を調査すること、それに加え異なる二社の雑誌を調査対象とすることで、クロス的に男女の別、出版社の別で傾向を見ていることが挙げられる。調査対象の雑誌は「日本少年」「少女の友」「少年倶楽部」「少女倶楽部」であり、前者二つが実業之日本社、後二つが現在の講談社によって刊行された。当初はこの4誌の創刊から終刊までを調査対象とする予定であったが、研究支援終了時にはすべての調査を完了してはならず、現時点では経過報告としてここに述べていく。

(図) 調査対象雑誌の刊行期間

| 年     | 「少女の友」 | 少女倶楽部 | 「日本少年」 | 少年倶楽部 | スポーツの出来事                     |
|-------|--------|-------|--------|-------|------------------------------|
| 明治39年 |        |       |        |       |                              |
| 明治40年 |        |       |        |       |                              |
| 明治41年 |        |       |        |       | 1903年早稲野球定期大会はじまる            |
| 明治42年 |        |       |        |       |                              |
| 明治43年 |        |       |        |       |                              |
| 明治44年 |        |       |        |       |                              |
| 明治45年 |        |       |        |       |                              |
| 大正3年  |        |       |        |       | 1912年日本オリンピック初参加             |
| 大正4年  |        |       |        |       |                              |
| 大正5年  |        |       |        |       | 1913年極東選手権(東洋オリンピック)大会開始     |
| 大正6年  |        |       |        |       | 1924年明治神宮大会はじまる              |
| 大正7年  |        |       |        |       |                              |
| 大正8年  |        |       |        |       | 1926年人見絹枝が第二回女子オリンピックで初優勝    |
| 大正9年  |        |       |        |       |                              |
| 大正10年 |        |       |        |       |                              |
| 大正11年 |        |       |        |       |                              |
| 大正12年 |        |       |        |       | 1925年日本陸上競技連盟/大日本相撲協会創設      |
| 大正13年 |        |       |        |       | 1928年ラジオ体操はじまる               |
| 大正14年 |        |       |        |       | 1943年野球用語の全面的日本語化            |
| 大正15年 |        |       |        |       | 1946年国民体育大会開始                |
| 大正16年 |        |       |        |       | 1959年プロ野球初の天覧試合              |
| 大正17年 |        |       |        |       | 1960年第一回パラリンピック開催            |
| 大正18年 |        |       |        |       | 1964年東京オリンピック開催/ラグビー全日本選手権開始 |
| 大正19年 |        |       |        |       | 1965年日本サッカーリーグ開始             |
| 大正20年 |        |       |        |       | 1979年東京国際女子マラソン開始            |
| 大正21年 |        |       |        |       |                              |
| 大正22年 |        |       |        |       |                              |
| 大正23年 |        |       |        |       |                              |
| 大正24年 |        |       |        |       |                              |
| 大正25年 |        |       |        |       |                              |
| 大正26年 |        |       |        |       |                              |
| 大正27年 |        |       |        |       |                              |
| 大正28年 |        |       |        |       |                              |
| 大正29年 |        |       |        |       |                              |
| 大正30年 |        |       |        |       |                              |
| 大正31年 |        |       |        |       |                              |
| 大正32年 |        |       |        |       |                              |
| 大正33年 |        |       |        |       |                              |
| 大正34年 |        |       |        |       |                              |
| 大正35年 |        |       |        |       |                              |
| 大正36年 |        |       |        |       |                              |
| 大正37年 |        |       |        |       |                              |

2020年3月現在、調査を終えている期間は「日本少年」(明治39年～大正14年)、「少女の友」(明治41年～大正15年)、「少年倶楽部」(大正3年～昭和14年)、「少女倶楽部」(大正12年～昭和37年)である。これら調査分の資料から、次の3点について分析することができた。

- ①明治期の「日本少年」「少女の友」の比較。
- ②「日本少年」「少年倶楽部」、少年誌間での比較。
- ③大正期に入ってから四誌の比較。

①明治期の「日本少年」「少女の友」の比較。  
 明治期はまだ「少年倶楽部」「少女倶楽部」は創刊されていない。そのため、先んじて創刊されていた「日本少年」、「少女の友」という同一出版社内の男女間の比較を見ていった。「日本少年」では、創刊間もなくの明治40年より相撲を扱ったイラストを掲載するなど、以降大正期になっても継続し

てスポーツ関連の記事が多い。

だが、その多くは記者の取材記事や見聞録などであり、小説などの読み物ではない。大学野球の記事が多く、ついで相撲、夏には水泳に関するものが多い。一方、「少女の友」ではスポーツに関する記事や読み物自体が圧倒的に少ない。大正期に入るとやや変化が見られるが、同一出版社内で見ると男女差として顕著な差が出たといえる。

#### ②「日本少年」「少年倶楽部」、少年誌間での比較。

大正期に入ると、「少年倶楽部」が創刊される。だが二誌を比較すると、「少年倶楽部」よりも「日本少年」の方が圧倒的に関連記事の数が多く、明治期より引き続きスポーツに関連する記事を掲載していることが確認できる。また、「日本少年」には運動用ラケット、室内用ピンポンスポーツの関連道具の広告が頻繁に登場するようになり、柔術や剣術など武術の解説本の広告も毎号のように掲載されていくようになる。これらの広告、記事内容からは、スポーツというものが、遊戯から「身体の発育増進の効果」を期待するものへと変わっていく様子がわかる。

一方、「少年倶楽部」は昭和期に入るとスポーツ関連記事が増え始め、何ととっても昭和2年から連載が始まった佐藤紅緑『ああ玉杯に花うけて』の存在は大きいものとなった。

この点は、数の上では後発の「少女倶楽部」には劣るものの、スポーツを題材にした読み物の代表作を生んだという意味で、「少年倶楽部」「少女倶楽部」の方が他の二誌に比べ、スポーツと娯楽性との親和性を高く示していることがわかる。

### ③大正期に入ってから四誌の比較。

大正期後半に入りようやく「少女倶楽部」が創刊される。ここで四誌が出揃い、「少年倶楽部」「少女倶楽部」間だけではなく、出版社を越えた比較ができるようになる。まず、「少女の友」と「少女倶楽部」では、圧倒的に後者の方にスポーツに関する読み物が掲載されており、四誌の中でも群を抜いて「運動小説」と呼ばれる読み物の掲載率が高い。「少女の友」は、スポーツを口絵という形で取り入れていることが多く、スポーツ自体の効果を謳うよりも、スポーツに身を投じる少女というビジュアルイメージの形成に傾く傾向があるが、この点については引き続き考察が必要である。

出版社同士の差異に関しては、今のところ読み物の掲載量や質の差によってはかることができるものの、グラビアや口絵の表現方法に関しては現在も調査中である。

1910年代、少年少女小説雑誌界の中心だった「日本少年」「少女の友」はやがて1925年前後より「少年倶楽部」「少女倶楽部」へと移っていく（今田絵里香『「少年」「少女」の誕生』ミネルヴァ書房 2019年10月）。今田は同著内で「少年倶楽部」「少女倶楽部」は読者を都市新中間層の男子・女子に限定することをやめたことで、都市新中間層の男子女子に加え、他の階層の男子・女子を読者として取り込むようになっていったと指摘する。

たしかに読者層の変化は雑誌の掲載内容にも大きく影響するが、四誌の中で「少女倶楽部」が最も読み物（小説）掲載率が多かったことは、のちに本誌が「少女フレンド」へと引き継がれる雑誌だったということも大きいだろう。調査分の期間の四誌に掲載されているスポーツ関連記事や読み物からは、季節感を感じるためのアイコンとして用いられる「スタイルとしてのスポーツ」、すごろくや懸賞などに取り込まれる「遊戯としてのスポーツ」、武術や柔術など、時に立身出世というワードとも結びつくことのある、「身体の発育増進のためのスポーツ」という3つの分類傾向が見てとれることがわかった。もちろんこれらはあくまで少年少女雑誌という媒体の中で消費されるスポーツであるということを念頭に置く必要はあるが、読者である少年少女がどのようにスポーツを受容していたのか、受容させられていったのかについても追って調査していきたい。

## 4. 研究者としてのこれからの展望

以上の調査結果を踏まえ、今後は未調査分の雑誌調査を完了し、昭和期までの傾向を分析していきたい。ひいては近年着手されつつあるスポーツ漫画・アニメとどのように本研究が接続していくのかという点について明らかにしていく。特に、エンターテインメントとしてのスポーツを日本はどのように受容し、消費していったのか、を探るためには引き続き本研究の継続は欠かせないだろう。今回の支援はこれまで踏み切れなかった横断的な調査を可能にする大きな後押しとなった。長期的視点でスポーツと文芸、エンターテインメントとのかかわりについての調査をまとめたものは管見の限り乏しく、今後は書籍という形で成果に残すことを目標としたい。

## 5. 社会に対するメッセージ

雑誌調査は主に資金面での負担が大きく、それは調査を進める上で決して小さなことではない。ことに、刊行年の長い雑誌を長期的にしかも複数調査する場合には、現実問題としてある程度のまとまった資金も要する。そのことが研究を妨げる理由となることも少なくない。だが今回このような形でご支援いただいたことは、それまで停滞していた研究を大きく推し進めることとなった。改めて感謝申し上げる。きっかけは「少女倶楽部」という一誌に限定した調査だったが、本研究を進めることにより、出版社の別、男女の別を越えた調査を通して、立体的になり、新たな発見を提示できたことは大きい。今はまだ一つの調査報告の段階ではあるが、以後は日本がスポーツをどのように受容し、来るオリンピックに向き合っていくのかについて接続していきたい。